



Vocational Education and Training Research, Development and Innovation

特集

オンライン授業の実践事例紹介

～オンライン授業で学生に支持される授業展開の工夫とは～

＜発展途上のオンライン授業＞

新型コロナウイルス感染症をきっかけに、新たな教育システムとして急速に拡大を見せるオンライン授業の展開。これまで本誌でもオンライン授業に関する記事を度々取り上げてきました。その中で発信してきたのは、**授業の双方向性（学生参加型の授業展開）の確保、一人一人の学生（個性）を大切にす**
る教員のサポート（学習面においても精神面においても）の必要性、授業の質の向上についてでした。

文部科学省が2021年5月25日に公表した、「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」（調査対象は2021年1月の緊急事態宣言地域「内」「外」の国公私大、高専の学生）では、令和2年度後期の授業のうち、オンライン授業がほとんど又はすべてだったと回答した学生は全体の約6割（ただし、この調査では「オンデマンド形式」「同時双方向形式」を分類しているかは不明です。）で、全体的な満足度としては、不満に感じる割合より満足に感じる割合の方が多かった結果でした。オンライン授業の良かった点としては、「自分の選んだ場所で授業を受けられる」、「自分のペースで

学修できる」ことが多く回答されています。一方で、悪かった点として、「友人等と授業が一緒に受けられず寂しい」、「レポート等の課題が多い」、「質問等双方向のやりとりの機会が少ない」、「対面授業より理解しにくい」などが多く回答されていました。これを受け、文部科学省としては、オンライン授業の実施にあたっては学生の声を丁寧に聞き、授業の質向上に努めることが必要としており、この点の工夫が今求められているといえます。

専門学校においては同様の調査が行われておらず、現状把握が十分ではありませんが、対面授業と並び、今後はオンライン授業又はハイブリッド型授業が主流化してくることが予測されます。コロナ禍で養成された専門職が自信をもって現場に出ていける教育をいかに行うかは、職業教育を担う専門学校等における重要なミッションであることはいうまでもありません。

今号では、専門学校等におけるオンライン授業について、3つの実践事例を取り上げ、各校で行われている工夫や成功事例を具体的に紹介します。

（編集部）

第17号の掲載内容

特集	1	オンライン授業の実践事例紹介 ～オンライン授業で学生に支持される授業展開の工夫とは～ 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター
	2	～コロナ禍における「新しい生活様式」を踏まえた教育活動～ 対面授業と遠隔授業を併用したハイブリット型実習の実施 学校法人仙台北学園 仙台リハビリテーション専門学校 作業療法学科 学科長 櫻井 直人
	4	学修効果を高め、教員負担を軽減するオンライン授業の展開を目指して 学校法人大橋学園 ユマニテク短期大学 幼児保育学科 准教授 田村 禎章
	6	日本児童教育専門学校 オンライン授業の工夫 学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校 副校長 阿久津 摂
	8	対面授業の代替から学修成果向上に向けたオンライン授業の活用へ 聖徳大学 文学部 教養デザインコース 教授 菊地 克彦
連載	10	オンラインで、アクティブ・ラーニングは可能か その2（第8回アクティブラーニングを考える） 学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター センター長 川廷 宗之
告知・募集	9	「コロナ禍と〇〇」・・・2021年度 4つの公開研究会 開催予告
告知ほか	12	敬心学園 第18回職業教育研究集会（旧学術研究会） 参加（聴講）募集 「敬心・研究ジャーナル」第5巻第2号（2021.12月末発行）投稿募集・次号告知

特集

～コロナ禍における「新しい生活様式」を踏まえた教育活動～ 対面授業と遠隔授業を併用したハイブリット型実習の実施

学校法人 仙台北学園 仙台リハビリテーション専門学校
作業療法学科 学科長 櫻井 直人

＜仙台リハビリテーション専門学校とは？＞

理学療法士及び作業療法士の2学科に専門特化した3年課程の養成校であり、定員は理学療法学科65名 並びに作業療法学科25名の少人数制で「即戦力の育成」「手厚い教育」をスローガンに掲げ、日々職業教育に尽力している。また、姉妹校である琉球リハビリテーション学院の協力のもと初年次教育の一環として3泊4日の海洋リハビリテーション研修を沖縄県で行うなど、学生が早期から高い志がもてるよう心も体も健康にアクティブに過ごすことを当研修のねらいとしている。



写真1 海洋リハビリテーション研修（沖縄県）

ハイブリット型実習 導入の背景

昨年5月より、卒業年次となる3年生は臨床実習が計画されていたが、9割以上の実習施設よりコロナ禍を事由に拒まれたことを受け、臨床実習の代替として対面授業による臨床実習（写真2）と遠隔授業による臨床実習を組み合わせたハイブリット型実習を開始した。

遠隔授業で実施された内容については、その後の対面授業において知識や技術のほか、遠隔授業で確認しづらかった表情や声色なども再確認を行い、臨床実習に即応かつ直結した指導をした。

なお、遠隔授業ではZoom アプリケーションを使用した。



写真2 学内における対面授業による実習の様子

具体的な運用方法

当校の臨床実習評価基準に基づく遠隔授業を導入した。臨床実習指導者の協力のもと、対面授業による実習の動画を遠隔で確認をしていただき、学生と双方向性通信で実習及び評価を実施した。臨床実習指導は当校の卒業生の協力を得て実施しているため、厳しくも優しい熱意のある臨床実習ならではの指導を受けることが可能となっている。これらの実習評価は、授業後に教員が対面と遠隔の相互を駆使して臨床実習指導者と連携のうえ、個別指導を実施している。なお、必要に応じて実習指導者の許可を得て録画機能を活用した。（写真3、4）



写真3 臨床実習指導者による個別指導

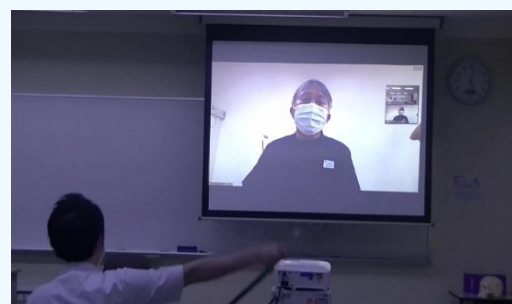


写真4 個別指導を受ける学生（実習生）

全国リハビリテーション教育協会

今後も様々な環境の変化に備えて対面授業と遠隔授業のハイブリット型教育は必要不可欠と考えられる。当校も会員として参画している全国リハビリテーション教育協会が開発した動画コンテンツ（e-ラーニング）（写真5）や図表を利用した授業も継続していく方針である。動画コンテンツ（同）は会員参画校が協同制作しており、解剖学及び生理学コンテンツが現在使用可能となっている。なお、今後は運動学コンテンツを開発し、年度内に運用される予定となっている。動画視聴後は理解度を確認するための問題が出題されるようになっており、動画視聴の状況は各学科の担任が確認することができるため、学生の学習進捗度を把握することも可能となっている。

動画コンテンツは会員参画校が協同制作しているため、全国の会員参画校と遠隔会議でタイムリーに有益な情報交換をすることができている。

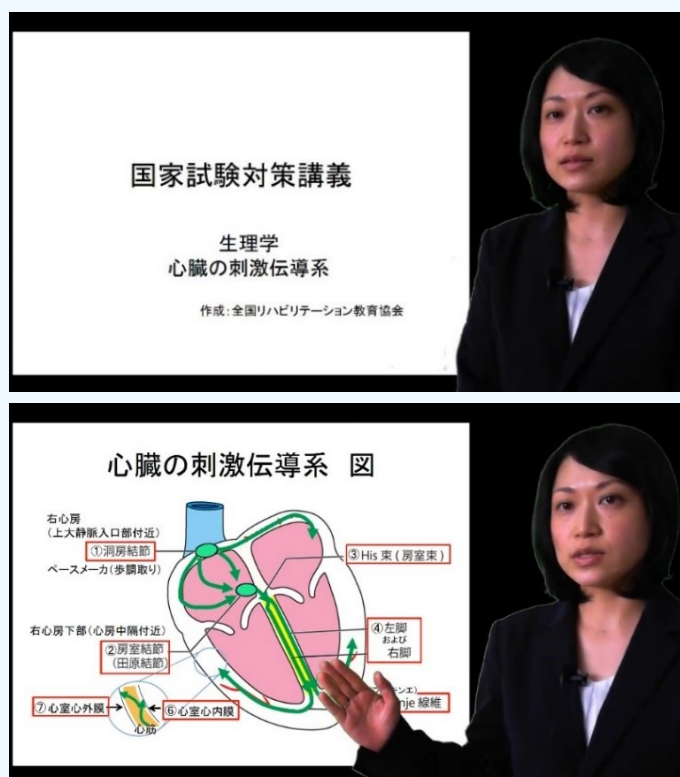


写真5 全国リハビリテーション教育協会が開発した動画コンテンツ（e-ラーニング）

※使用してる図表は協会で共同開発し、現在加盟校で共同使用している。

今後の展望

コロナ禍により医療機関等における臨床実習の機会が失われたことから、就職後のことを案じている学生も少なくないと思われる。また、就職先を選択する段階でミスマッチを起こすことも懸念されている。当校は殊にコロナ禍における在校生の卒後教育の充実を視野に入れ、恒例となっている当校主催の各種研修会を遠隔に切替えて研修会（写真6）を実施するなど、医療機関等と同窓会との連携を強化し、卒業後も安心して活動できる環境を整えていきたいと考えている。（図1）

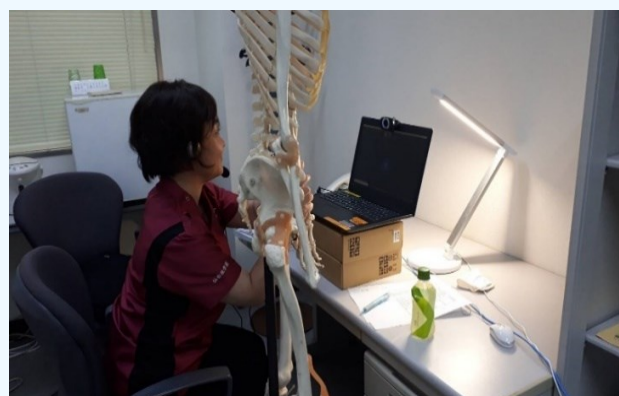


写真6 卒業生を対象とした研修会の様子（遠隔研修会）

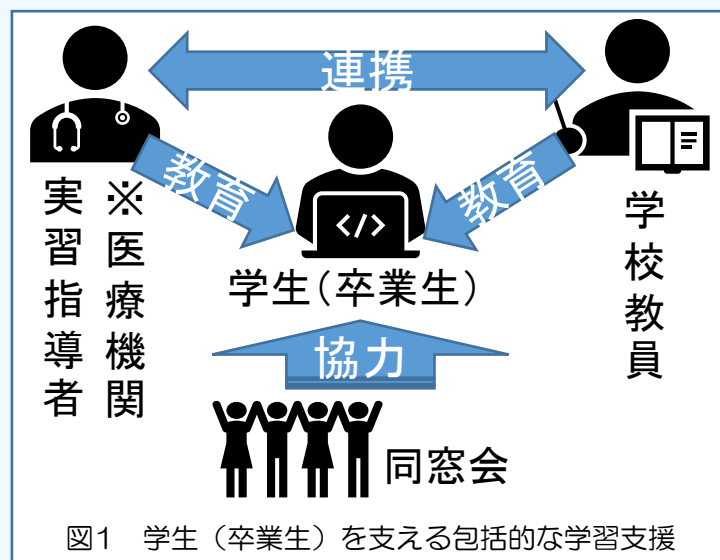


図1 学生（卒業生）を支える包括的な学習支援

理学療法士及び作業療法士はリハビリテーションの専門職種であり、身につけた知識や技術が様々な人々の助けとなり、その喜ばれる姿を通じて自らもその喜びを感じることができる職業である。理学療法士及び作業療法士にも時代の変化とともに多様な役割が求められ、医療人として人として確かな成長が感じられる素晴らしい職業である。

特集

学修効果を高め、教員負担を軽減する オンライン授業の展開を目指して

ユマニテク短期大学 幼児保育学科 准教授 田村 禎章

福井県立大学・同大学院 非常勤講師

名古屋市立中央看護専門学校 非常勤講師



1. はじめに

コロナ禍の中、様々なオンライン授業の展開が模索されている。『大学DX ―高等教育デジタル・トランスフォーメーションの可能性―』（2020）の著者である松原 聡氏（東洋大学）は、アフターコロナにおいても、大学授業は、すべてオンライン化される可能性があることを示唆している。筆者は、この大学DXへの潮流は、職業教育を中心におく専門学校教育へも少なからず波及すると考えている。

さて、大学、短大、専門学校等の高等教育機関には、従来からプロジェクターやDVD再生装置、マイクとスピーカー、書画カメラ等が設置されていることが多い。つまり、これらを使用することで、具体的な事物を授業内で提示することや、映像教材や音声資料、各種のデモンストレーションを行うことができるインフラが整備されている。その意味で、オンラインやオンデマンド授業を行う素地は整っていると考えられる。

本稿では、筆者が常勤及び非常勤にて在勤している3つの学校のオンライン授業の実践事例を採り上げ、効果的・効率的な授業展開の在り方を模索する。なお、所属する学校の機微情報や学生個人情報等については配慮の上、執筆する。

2. 授業形態の在り方としてのオンライン授業

オンライン授業等の展開について、筆者の本務校であるユマニテク短期大学では、「ICT教育推進チーム」を立ち上げ、オンライン授業の種類と形態、特徴について以下のとおり、整理をしている。

①オンデマンド型授業	②リアルタイム配信型授業
A. 授業を録画し、学生が希望する時間帯に視聴するもの	E. Zoom、Google Meet等、ビデオ会議サービスを使うもの
B. 対面時の授業の様子を録画したもの	
C. 研究室など比較的プライベートな空間で録画されたもの	F. YouTube Live等を使用した配信型授業（ライブ型含む）
D. 映像を使用する通信料を考慮して、音声のみとするもの	

以上のほか、対面授業とオンラインを組み合わせる、いわゆる『ハイブリッド型授業』も検討できる。

3. 筆者のオンライン授業の実践

（1）福井県立大学・同大学院

＝Zoomを使用した授業（少人数型）

福井県立大学では、少人数制（5名未満）の資格科目の授業を担当している。同大学ではオンライン授業に対する教員サポートが充実しており、安心感があった。少人数制のため、筆者はZoomを利用したオンライン授業を希望し、以下の諸点に留意し、授業実践を行った。

【授業前のアプローチ】

- 少人数制であることに鑑み、学生に許可を得て、事前に印刷した教育教材を送付した。さらに、大学発行のメールアドレス等を活用し、授業で利用した資料の共有や授業ディスカッションのメモなどを共有することを工夫した。

【授業の実際】

- 授業の際には学生のオンライン授業へ取り組むヒアリングを重視して雑談をするなど、授業導入が硬くならないように工夫した。また、一部の学生はPCのカメラ機能の影響により、顔が見られないまま授業をすることもあり、反応がわからず苦慮した面もあったが、声掛けや質問をしてもらうなどの効果により解消できた。
- 少人数制の対話型授業で、話が拡散したり、筋道がぶれる授業となることが課題だったため、授業計画として50分ごとにテーマを設けて講義するよう心がけた。なお、オンライン授業の場合50分程度が限度であり、おおよそ50分ごとに10分の休憩や振り返りシートを記入する時間にあてた。
- PPTスライド、映像配信、インターネット検索、オンライン学会の参加など多様な授業展開に取り組めたことは効果的であったと考える。

【授業後の学生のフォローアップ】

- 授業のはじめに、シラバスや授業スケジュール、授業後の課題レポートを提示することで、「何を学ぶのか」が明確になったことが実感できた。
- 授業内で共同作成したメモやレジュメ（Wordを画面共有にて使用）を、毎時間、メール等で送信して学習の振り返りと記録が保存できるように配慮した。
- 次回の授業内容をあらかじめスケジュールにして、メール配信しておくなどの工夫を行った。

(2) 名古屋市立中央看護専門学校

＝Zoomを使用した授業（大人数型）

名古屋市立中央看護専門学校では、Zoom配信による大人数型（40名程度一斉授業・講義）の授業を行った。教員が学校に行き、授業配信ができる体制が整っており、教員のサポートも良く、負担なく授業実施ができた。

【授業前のアプローチ】

- 授業で使用する教科書教材、レジュメ資料をあらかじめ、すべて印刷してもらい学生宅へ学校より送付。レジュメ資料は穴埋め型として、授業内にて講義をしながら穴埋めを行っていく手法を取り入れた。

【授業の実際】

- Zoom機能の「チャット」にて出席番号順に出席をとることから授業を開始した。チャットでは学生へ順番に出席番号を入力をしてもらい、途切れたらお名前を呼び確認する方法で出席確認を行った。
- 90分の授業を、40分1コマ・40分1コマへ分け、途中で小休憩や質問・発問を促す工夫をした。「見ただけでつまらない」というZoom授業を受けた学生からの経験談に学び、PPTは一切使用せず、事前に送付したレジュメ資料を画面共有し、ワード画面にて筆者がキーワードやメモを打ち込み、板書代わりとする授業を心がけた。
- 顔は映らないが、随所で出席番号での発問をして回答を促すなど一方通行とならないような工夫をした。

【授業後の学生のフォローアップ】

- 全授業で学生が記入したレジュメ資料を集めて、授業で講義した内容のメモがとれているかを確認した。また最終レポートとして、授業内で伝えた課題を提出してもらった。採点が膨大で大変であったが、対面授業よりも学習進度や状況について、一人ひとり深く把握できた。
- 大人数のため質問を受け付けることが少ない点が課題と考えている。

(3) ユマニテク短期大学

＝YouTube Live生配信授業の検証

ユマニテク短期大学（本学）では、感染者が発生していない状況等により、可能な限り対面授業（分散授業、時間短縮授業、レポート併用授業は段階に応じて実施）にこだわり、オンライン授業については実施していない。しかし、緊急事態宣言下や感染者が発生する可能性があることから、「ICT教育推進チーム」を学内に立ち上げ、オンライン授業へ段階に応じて切り替えできる体制整備をしている。

本学が積極的に取り入れていきたいと考えているのが、YouTube Live等の配信機能を想定した『生配信授業』である。もちろん、双方向型のZoomを取り入れた授業等の併用も考えているが、生配信授業の最大のメリットは、教員側の負担軽減と、オンライン授業を行いながら、映像保存され繰り返し学習が可能なオンデマンド型授業を行えることである。先述のZoom配信による授業をはじめ、遠隔授業のほとんどが教員側にとって授業方法を一新しなければならず、授業内容の精度より教育方法を重視しがちになることによる「教育内容の質の低下」が懸念される。また、Zoom授業の場合は録画・録音は一部されるが、繰り返し視聴するものには不向きであることから、再現性は期待できない。YouTube Live等においては、無料視聴を原則としていることから配信制限や著作権上の問題については精査しなければならないが、各高等教育機関で活用しているLMS（Learning Management System）と併用すれば、映像配信型授業は比較的容易に可能となることがわかってきた。現在本学のLMSを活用した実証実験を行っている段階である。

教育改善を行っていく必要性は十分にあるが、多忙な教員にとって授業構成を変えることなく授業が実施できる映像生配信授業は、注目できる教育方法であると考えられる。



オンライン授業における技術的なメモ（ユマニテク短期大学ICT教育推進チーム）

オンライン授業を展開していく上での技術的な点について、以下の方法を検討しているため、参照されたい。

- ④ **マイクは精度の高い機材を採用**したほうがよい。安価なものでもいいので、**コンサート用やオーディオ用のもの**が必要。マイクとヘッドホンを使うことで、ハウリングを避けたり、学生が聞き取りやすい環境を構築できる。
- ④ **「オーディオ・インターフェース」が必要**
パソコンにマイクを接続するために必要な機材。ツマミでマイクの音量を調節できるものであれば安価なものでよい。さらに複数のマイクをつなげることができ、ミキサー（切り替え）機能があれば、対面授業時でもチームティーチングや会議など、マイクを複数台使用したいケースで活用できる。コンプレッサー（調整）機能がついていれば、大きな音をカットできるので、受講者はたいへん聞き取りやすくなる。
- ④ **カメラは三脚で立てる**
ウェブカメラでも一眼レフカメラでも、オンラインで学生に授業を配信する際、カメラは目線の高さで離れたところにあるのがよい。ノートPCについているカメラや、スマホのフロントカメラでは顔面に見下ろされる感じになり圧迫感が高い。この状態で長時間の授業を受けるのは、精神的にもきついため、画面内30%程度の比率で教員が映り、同じ目線の高さくらいが受講者には圧迫感なく受講することができる。

 特集

日本児童教育専門学校 オンライン授業の工夫

 学校法人敬心学園 日本児童教育専門学校 副校長
 阿久津 摂

 ～オンラインでも楽しく
 身につく授業を～

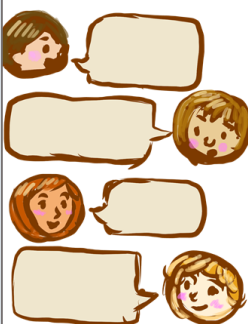
昨年度コロナ禍の中、安全に授業を実施するため急遽、オンライン授業を全教員にお願いすることになった。保育士養成という学校の特性上、実技や実践力を伸ばしていく必要がある科目が多い中、専任、非常勤を含めて講師の先生方はさまざまな工夫をされていた。

本校は期初にかならず「総合講師会」という、すべての教員が参加する会議を実施している。本年度前期の会議では、昨年度授業で実践し、授業の活性化や学生の理解につながった取り組みについて「オンライン授業勉強会」と称し、ウェビナーを行った。今回は特に学生の授業に向かう姿勢を前向きにする工夫について焦点を当てた。以下、「学生が聞いているのかな」「学生が理解しているのかな」「学生に積極的に参加して欲しいな」「学生同士、相互交流して欲しいな」という4つのポイントで事例を紹介する。

「学生が聞いているのかな？」

①岩崎 桂子 先生「保育者論」

工夫【学生を指名して発言を求める】



1. 岩崎桂子先生「保育者論」

工夫【学生を指名して発言を求める】

毎回DVD視聴～質問～回答

1 講師から質問

2 回答を受けて回答
「さっき、〇〇さんが、～という意見を出してくれましたが、これについて、あなたはどう思いましたか？」
回答を聞いていないと答えにくい。

・自発的な回答ができるような環境づくり

1. 岩崎桂子先生「保育者論」

- ・自発的な回答を求めるのには時間がかかるので、最初は講師からの指名制
- ・慣れてくると「次は誰の意見を聞いてみたいですか？」と学生が学生を指名（リレー方式）
- ・一回で10名前後、ランダムで指名。
- ・指名した学生をメモし、まんべんなく。



1. 岩崎桂子先生「保育者論」

「保育者論」という科目の性質にもよるかと思いますが、
 「自分の意見を持つ」
 そのためには
 「広い視野を持つ」
 ということを意識できるようにしました。

<例> 子育て中の学生の立場からの回答等

岩崎先生は様々な背景を持つ学生像を意識しながら、丁寧な声掛けとともに学生の能動的な発言を引き出している。

「学生が理解しているのかな？」

②小林 桂子 先生「人間関係」

工夫【人形での実演・クイズ、ゲーム的要素】

2. 小林桂子先生「人間関係」

工夫【人形やクイズを取り入れる】

現場の実例検討を行う授業

授業の中で、ペープサートやぬいぐるみを使用して、「保育の場面」や「子どもたちのやりとり」をわかりやすく実演



・現場に立つことを意識させる

『ヒーローごっこだけど、友だちを投げ飛ばしたことは、悪役にみえないかな？』



保育園の子どもたちは、ぬいぐるみに感情移入して相手の立場になって考えている。

更に学生も、子どもの視点から分かりやすく理解できる。

クイズやゲーム的要素を取り入れ、学生が飽きないように工夫

質問「保育の現場は〇〇〇さがし」

→ チャットやメールにて回答

※メールチェックが大変。2021年度はteams。



友だち・こども・たから・・・

 など、マルかバツかではなく
 「考えること」を大切にしている

小林先生はぬいぐるみやペープサートを使い現場の実例をわかりやすく実演、クイズを入れて自ら考える機会を設けている。話し方も子どもと実践する際に参考になるような口調で授業を展開。

「学生に積極的に参加して欲しいな」

③三島 秀晃 先生「保育者論」

工夫【講師が子ども役・学生が先生役】

2.三島秀晃先生
「保育者論」

工夫
【講師が子ども役・
学生が先生役】



ハウリング!!

基本は座学授業。途中の10分間「手遊び」を入れてリフレッシュタイム。しかし一緒に行動するとハウリングするなど上手く行かない。

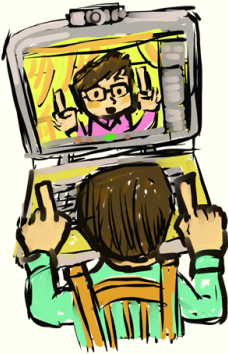
【授業の工夫 1】

設問：手遊び「1と1で！」
3、4、5歳児で行う際の工夫は？

ブレイクアウトルームで
ディスカッション

学生側が先生役になり
手遊びを教え、
講師が教えられた
手遊びをする。

3歳児なら？
4歳児なら？
5歳児なら？



工夫【画面共有でみんなの意見を取り入れる】

<授業の工夫 2>

保育園の指導案に記入する内容を皆で考える

1. ワードで作った指導案の表のフォーマットを画面共有

2. 学生をランダムで指定し、講師が打ち込んでいく（もう一度当てるかもしれないと事前に伝える。指名した学生の氏名はチェックし、まんべんなく。）

3. 皆で考えることにより学生が記入しやすい

ねらいは？ 保育士の援助は？
子どもの姿は？

【日 案】

月 日 () 曜日	天気	時間	記録者
子どもの姿			
ねらい			
活動の展開			
子どもの姿・展開解説			
保育士の援助・解説			



三島先生は保育の場面で必ず必要な手遊びをオンライン授業でも工夫して実践。記述の苦手な学生が躓きがちな指導案作成も、画面共有というメリットを生かし、スムーズな作成に導いている。

*本稿掲載のPPTの絵は、本校造形講師のなかむらしんいちろうが作画した

「学生同士、相互交流して欲しいな」

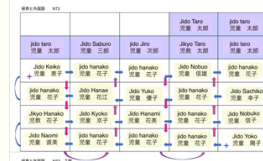
④金藤 明美 先生「保育と外国語」

工夫【エアース席表を活用しスムーズな授業運営】

2.金藤明美先生「保育と外国語」

工夫【架空の座席表を作って共有しよう(画面共有)】

隣の方に英語で挨拶をする授業



- ・ワードで通常の教室の座席表のように作成（単位認定者等を除いて）
- ・スムーズに英語の挨拶等、会話が流れた。
- ・Aコース、Bコースなど使い分ける。

工夫【ミニノートブック作成で楽しく自己紹介】

2.金藤先生「保育と外国語」

工夫【ミニノートブックを作る】

英語で自己紹介をする授業



- ・1枚の紙から8ページの小冊子を作る。
- ・「1ページ目は名前」
- ・「2ページ目からは自己紹介したい内容」
- ・好きな食べ物、趣味、週末の過ごし方など
- ・絵や写真などをつけて自由に作成
- ・ブレイクアウトルームで5～6人のグループを設定し発表し合う。

次のページに参考になるYou Tubeを紹介します

金藤先生は表を画面共有しながらルールをわかりやすく説明し、学生がとくためらいがちな英語での発言をうまく引き出している。

⑤玉置 充佳 先生「保育と外国語」

工夫【「あみだくじアプリ」でグループ分け】

2.玉置充佳先生「保育と外国語」

グループ分けに良い方法はないかな？

グループディスカッションを行う授業

工夫
【アプリソフト「100人あみだ」】

最大100人・最大5グループ
自動の「あみだくじ」になっている。



玉置先生はそのほかにも「クイズレット」というアプリでクイズを視覚的に楽しめるような工夫もされている。アプリの活用も授業のスパイスとなり、学生を引き付けている。

～まとめ～

二次元の画面に長時間向き合うことになるオンライン授業だが、楽しい仕掛け、画面共有やアプリの使用など、オンラインの優位性を活かし、活気のある授業をされている各講師の姿に大いに触発された。今後もこのように講師間で、互いに良い実践例を共有する機会を設けていきたい。

特集

対面授業の代替から学修成果向上に向けた
オンライン授業の活用へ聖徳大学 文学部 教養デザインコース
教授 菊地 克彦

本特集のまとめとして、各教育機関のオンライン授業の工夫事例と今後のオンライン授業の方向性に関し、筆者の所感を述べたい。

オンライン指導が難しい臨床実習への挑戦

仙台リハビリテーション専門学校では、通常、実習施設で実施する臨床実習を対面による学内実習とその動画を用いた臨床実習指導者による遠隔指導を組み合わせたハイブリッド型で実施している。コロナ禍での現場実習指導は各校の悩みの種と推察するが、この取組みは、その解決に資する事例である。また、コロナ禍に在籍した学生の卒後教育強化は重要かつ意義の大きい取組みと考える。

クラス規模別のオンライン授業設計

福井県立大・大学院、名古屋市立中央看護専門学校の事例では、クラス規模別の授業設計のプロセスや留意点に関し、授業前の準備、授業導入、授業時の学生把握、授業時間の設定、授業後のフォロー等が丁寧に紹介され、オンライン授業の設計に有効な知見を得ることができる。ユマニテク短大の事例は、現実問題である教員負担も考慮しつつ、学修効果アップを目指す意欲的な取り組みと考える。

他校でも取り入れやすい様々な工夫

日本児童教育専門学校では、授業参加状況のチェック、授業理解度の向上、授業への参加促進、授業内の学生交流の視点から多様な取り組み・工夫が紹介されている。双方向性の担保を前提に授業に興味を持たせ、参加を促し、理解度を高める様々な工夫や各教員のベストプラクティスを学内全体で共有している点は他校にも大いに参考になると思われる。

これからのオンライン授業

コロナ禍が終息した後の授業のあり方には、対面が主、対面＋オンラインのハイブリッド、全面オンライン化等の意見があるが、おそらくハイブリッド型になるのだろう。全面オンライン化ではないにせよ、コロナ禍におけるオンライン授業の試行により、その優位性、メリットが広く認識された意味は大きく、オンライン授業の最先端をいくと言われているミネルバ大学の事例がより身近に感じられるようになったと思われる。

今後は、対面授業ができない場合の代替的位置づけではなく、オンライン授業の持つ本質的な優位性・メリット等を活かし、学修成果を向上させるためのオンライン授業の活用を研究し、実践していくことが必要である。そのためには、対面授業とは異なる、オンライン授業の特性に合わせた設計の考え方、授業フォーマット（構成要素・進行方式等）、評価方法等が必要になる。紙幅の関係で詳述できないが筆者が想定するオンライン授業設計上の検討点は以下である。

1. 授業時間の再設定 2. 講義と課題の時間配分 3. 課題内容と課題量 5. 事前・事後の学修内容と量 6. 授業内の発問内容と頻度 7. 授業内アクティビティ（ディスカッションやプレゼン・グループワーク・ゲーム等）の実施量・頻度 8. 評価の項目や方法等

今後は、これらに関する研究・実証を重ね、効果的なオンライン授業フォーマットを確立させなければならない。そして、ICTの活用により学生の授業やアクティビティへの参加・課題取り組み状況等をデータで可視化し、データに基づく個別指導と適切な評価により学修成果を向上させることが求められる。最後に、これらの実現に向けて問われるのは教員の授業力である。

告知・募集

2021年度 公開研究会 開催予定

今年度は、コロナ禍をテーマに、年4回の研究会を企画・実施いたします。

コロナ禍
と社会

第14回 (7/16)

コロナ禍で浮き彫りになったこれからの
『福祉サービスの在り方』について

コロナ禍による環境の変化に伴い、今までの生活スタイルや社会生活にも変化が必要となった今、福祉サービスの在り方についても変化が見られます。

そこで、「福祉サービスの発想の転換」

に焦点を当て、コロナ後も含めたこれからの「福祉サービスの在り方」について考える機会とします。



第15回 (9/17)

コロナ禍
と地域

学校と地域との「連携」が生む効果
～地域がもう一つの学びの場に～

2018年～2020年の3年間、文部科学省委託事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」を進めてきました。

コロナ禍の影響も含め、3年間のモデル校などの取り組みや成果物である「ワークブック」を活用した取り組みを見直すとともに、これからの取り組みについて『連携』という視点を加え、地域という大きな応援者と一緒に、どのような学生支援が出来るかを考える機会とします。

2021年度
公開研究会テーマ
『コロナ禍と〇〇』

コロナ禍と
コミュニ
ケーション

第16回 (1/14)

学生と上手に関わるには何が必要か
～パントマイムから学ぶ?!
表現力とコミュニケーション力!～

専門学校等の学びの場では、年齢層や国籍など多種多様となった環境の中で、いかに学生とコミュニケーションを計るかが課題の一つです。そこにコロナ禍が加わり、人と人との直接的な関わりがどんどん少なくなっています。

パントマイム・教育演劇学といった、違った分野から、伝えることの大切さを「教員と学生」間のコミュニケーションのあり方に繋げ、ヒントを得る機会とします。

第17回 (2/11)

コロナ禍と
仕事&学び

人生100年時代の
キャリアと学びを考える
～シニア再起動に向けた職業教育～

“老後”という概念が消滅しつつあります。定年後も職業人として、仕事を継続するシニアが増加しています。キャリアを再起動するシニアは、これまでの思考・判断・行動パターン等の中から不適応なアプリをアンインストールし、不足するアプリを新たにインストールしなければなりません。それを実現するリカレント&アップデート教育のあり方、職業教育のイノベーション、その前提としてのシニア教育の課題等について考える機会とします。

※公開研究会の詳しい情報は、ホームページに随時アップされますので、ご確認ください。
また、日程およびタイトル、内容は変更する場合がありますので、予めご了承ください。



第8回 アクティブ・ラーニングを考える・・・

連載

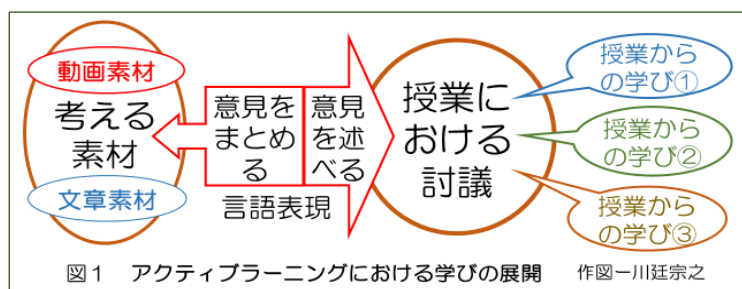
オンラインで、アクティブ・ラーニングは可能か (その2)

このニュースレターでは、第12号の4ページに「ネット授業の展開に向けて」として、第13号の1～3ページに「オンライン授業の展開に向けて」、そして前号では『オンラインでアクティブ・ラーニング（以下「AL」と表記）は可能か。その1』を掲載した。それらの内容を引き継ぎつつ、オンラインでのALの展開方法に関して、以下に触れておこう。

【楽しい授業は学生参加型が基本

・・・そのためには、予習課題が大切・・・】

この点是对面型授業でもオンライン授業でも基本は同じことである。ALで学生が授業に参加するというのは、教員との質疑応答であったり、討議であったりするだろう。その場合にもっとも重要なことは、図1に示すように、そのテーマに関する自分の意見（主張）を事前にまとめておくことである。



このプロセスを大切にしないALはほぼ失敗する。とすれば、そのテーマの内容と同時に、提示の仕方が参加者にとって、とても大切になってくる。従来、このテーマ設定や素材は、指定文献を読むなどの方法で示されていた。しかし、ネットを活用した授業であるオンライン授業では、この素材の提供に様々な表現手段を使える。従来の対面授業でも、動画教材は使われていたが、教室内で見るのが主流であった。しかし、ネットの活用が進むと、これらの事前学習素材はネット経由でいくらかでも事前に流せる。勿論、この方法はオンライン授業に限らず、対面授業でも使える（ごく、一部では行われていたが）。

【PBLの展開と、基礎知識の修得 使えると楽しくなる「基礎知識」】

この学生参加型授業展開に関しては、比較的取り組みやすいPBL（問題発見・問題解決型学習法）を中心に考えるとよい。PBLは、当該専門職が対

応する業務上の課題（の部分）への取り組み方（解決方法）を考えていく、広く活用されている授業方法の一つである。

とすれば、次の問題は、この問題解決に使う専門領域の基礎知識をどう修得していくかである。解決を要する様々な問題に取り組むには、それなりの（専門的）基礎知識や技術が必要である。ネット活用での学びは、この点でも大きな力を発揮する。一つは、学生がネット上で、必要な内容を探し出して学ぶという方法である。もう一つは、解決に必要な基礎知識を担当教員がまとめた教材をネット上で見ることができるようしておくということである。

【学生が「学びたい」授業が求められている】

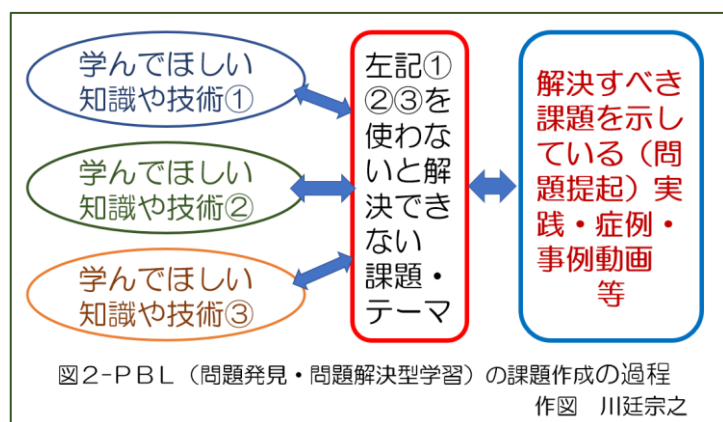
日本における学校の授業は、この基礎知識の習得が目的になっている場合が多く、そのために試験に出そうな内容を丸暗記するというような勉強が強要されたりする。当たり前の事ではあるが、何のために使うのか判らない内容を覚えろと言われても、意欲が湧くはずがない。いうまでもなく知識や技術は「使う」ためにあるので、使えない知識や技術は意味がない。学びのプロセスとしても、これを知りたいという欲求を前提とする方が身に着く知識を得られるし、その知識や技術を使って考えたり行動したりすれば、さらに着実に身に着く。この学びのプロセスがALの基本の一つである。

【楽しめる「専門的」授業準備 どういう課題から、何を学ぶか】

このようにALでは、当該科目の達成課題（出来るようになる課題）に対し、その課題をどう切り分け、どの課題でどの知識や技術を使っていくかに関する詳細な「授業設計」が必要になる。

(※授業設計＝その授業で出来るようになる目標を明確にし、それに向かって必要な基礎となる課題や知識・技術を整理し体系化した物。)

これを整理したのが、図2である。



基本は中央の課題（テーマ）であるが、これは右側の実践・症例・事例等のポイントを言語化したものであるから、本来は、右側の内容が示されないと問題解決には取り組みにくい。PBLでは、この実践を図1にある「考える素材」として解決策を創っていく。その際、「学んでほしい知識や技術（＝問題解決に必要な知識や技術）」は、自分で探して身に着けるのが原則であるが、教員がヒント（資料）などを示していく場合もある。

日本の学校教育では、多くの場合、この左側の「学んでほしい知識や技術」を授業で教員が解説するという場合が多いが、これは極めて非効率的な学習方法だと言えるだろう。

【楽しんで学んだ成果の確認と共有

・・・できたことが適切に定着していく・・・

勿論、解決策を学習者が考えたらそれで終わりではない。その解決策が適正かどうか、まずは学習者集団の討議に委ねられる。ここでの討議法が適切であれば、適正な解決策は見出しやすいが、常にそうなるとは限らない。そこで、グループ討議の結果を全体で確認、共有しながら、どれが適正か、どういう材料（知識・技術）をつかって、どういう討論経過によって答えに至ったかを発表してもらいながら、教員が確認し、不適切な点は指摘し、見落とした材料や討議プロセスについて助言し、学習者たちの「授業からの学びの内容」を確認していくことが求められる。そこに新たな発見を楽しんでいくという、発想や確認が大切である。

【周到的準備が必要なオンライン授業

・・・『授業設計』から『シラバス』へ・・・

このように、授業に関しては、教員は一定の答え（それに必要な知識技術も）を想定しながら、その内容を「授業設計」としてまとめておく。（これを的確に行っておかないと、授業が混乱する。）その上で、学習者に課題を示すことになる。勿論『学んでほしい知識や技術』は伏せられる。この『課題』やそれを解く目的や方法（やヒント）を示しているのが『シラバス』である。従って『シラバス』は教員手持ちの『授業設計』とは違うし、従来の『授業概要』とは全く違うものである。

【オンライン学習者の発想から学ぶ

・・・教員も授業を楽しむ・・・

オンライン学習では北海道から沖縄までどこからでも多彩な方々が参加できる。そのため、色々な材料を使って色々な発想法で答えを出してくる場合が多い。違う意見が多いので討議も内容が深まっていく。

その過程からは、教員にとって（「授業設計」からは）想定外の解決策や答えが出てきたりする。それらは、必ずしも間違いとか不適切とは言えず、教員にとっては（もちろん学習者にとっても）新しい発見であり知的な刺激となる。授業中に学生たちの発言を、ごく僅かな違いも見逃さない様に聞いていると、こういう発見は少なくない。これは、教員も問題解決メンバーの一員として参加している状態であり、学習者と仲間として共に学び合う集団となっていく。

こういう感覚が学習者と教員に生まれてくると、オンライン授業は双方にとって、（かなりの予習課題をこなさなければならなくても）とても楽しい待ち遠しいものになる。教室ではないので、その気になればいくらかでもサボれるオンライン授業を学生が楽しむためには、教員も楽しんでいることが大切な要素である。

勿論、こうなるには、オンラインだから出来る個別の学習支援が欠かせない。この個別指導や、オンラインの場合の（成績）評価（学習効果測定）については、次回に触れる。

≪職業教育研究開発センター長／

大妻女子大学名誉教授 川廷 宗之≫

 告知・募集

敬心学園 第18回職業教育研究集会（旧学術研究会） 参加（聴講）募集

職業に生きる実学としてのコミュニケーション

2021年8月21日（土） 10:00～13:00 Zoom開催（講演はウェビナー）

10:00 開式の辞～講演

11:40 口演発表（敬心学園教職員・卒業生・職業教育研究開発センター研究員による分科会）

講演は『誰も気づかなかった子育て心理学』『基本的自尊感情を育てるいのちの教育』『いのちの教育の理論と実践』など、数々の著書・講演をされる

近藤 卓先生（日本ウェルネススポーツ大学 スポーツプロモーション学部 教授）をお招きします。ぜひ、今後の授業に、コミュニケーションに活用してください。



口演発表（分科会）は、敬心学園各校の教員 職業教育研究開発センター研究員 12組による4分科会を予定。詳細は、後日お申し込みいただいた参加者へご案内する抄録集にて、ご確認ください。

<参加（聴講）のお申込み・お問い合わせ先>

・申込フォーム URLまたは、右下のQRコードから：

<https://docs.google.com/forms/d/10npqQH8EUwPmlC16lCwRVR3hkTdvf5C2hTpX9Tcb85c/edit>

・Mailから：journal@keishin-group.jp

メールの場合①組織・団体名 ②部課名・役職 ③お名前 ④電話番号・メールアドレス（抄録・ZoomのIDなど連絡先） ⑤卒業生の方は卒業校・年度をお知らせください。



各Zoom会場（IDなど）は、後日参加者へご案内します。会費は無料です。

〔事務局〕学校法人敬心学園 職業教育研究開発センター TEL：03-3200-9074 担当：杉山・大内

 募集

「敬心・研究ジャーナル」第5巻第2号（2021.12月末発行）投稿募集中！

以下の内容をご確認のうえ、ぜひお申込みください。

【投稿：入稿関連スケジュール】

投稿（原稿タイトル・原稿種別など）エントリー（送付）締切り……8月10日（火）

査読あり原稿 入稿締切り…9月10日

査読なし原稿 入稿締切り…11月10日



【投稿カテゴリー】原著論文、症例・事例研究、実践報告、研究ノート、評論、シンポジウム・学会研究会報告

【投稿先】職業教育研究開発センター「敬心・研究ジャーナル」事務局 journal@keishin-group.jp

投稿に関する詳細は「編集規程」「投稿要領」「執筆要領」をご確認ください。

（本誌巻末または、右記QRコードよりHP掲載内容をご確認ください）



【投稿資格】原則として敬心学園の教職員、職業教育研究開発センター研究員（編集規程より抜粋）

研究員登録：RDIのHP http://www.keishin-group.jp/keishin_fr/rdi/researcher.html より登録、

または、メール vetrdi-kensyu@keishin-group.jp にてご連絡ください。

次号予告 10月15日発行予定

<特集>人生100年時代のキャリアと学びを考える パートⅠ ほか